

TIC NEWS

vol. **74**
2005.1

(財)とやま国際センター

〒930-0856 富山市牛島新町5-5

インテックビル4F(タワー111)

TEL (076) 444-2500

FAX (076) 444-2600

E-mail: tic@tic-toyama.or.jp

URL: <http://www.tic-toyama.or.jp>



財団法人とやま国際センター創立20周年記念式典

(財)とやま国際センター 創立20周年

財団法人とやま国際センターはこのたび創立20周年を迎えました。県民の皆様、関係者の皆様に支えられ歩んできた20年の道のりを振り返り、今後さらなる国際交流、国際協力の発展に努めたいと考えています。

(財)とやま国際センター創立20周年記念式典

日時：平成16年10月28日(木)

場所：パレブラン高志会館カルチャホール

財団法人とやま国際センター創立20周年記念式典が行われました。また国際交流に貢献した個人と団体に表彰状と感謝状が贈られました。

あわせて、(財)フォーリン・プレスセンター理事長 寺田輝介氏による記念講演も行われました。



◆知事表彰

- ・(財)松翁記念財団
- ・日本富山県・中国雲南省友好協会

◆とやま国際草の根交流賞

〈個人の部〉

- ・岡田昌代
- ・小沼 茂
- ・宮本公子
- ・村上あおい
- ・山瀬重二

〈団体の部〉

- ・くろべみズフライトの会

◆創立20周年記念特別顕彰

- ・ウラジオストク・トヤマ会
- ・ソウル温水産業団地管理公団
- ・プレイヤーズ・スタジオ・デブレツェン
- ・遼寧省文学芸術界連合会

◆感謝状

〈役員の部〉

- ・八嶋健三
- ・中尾哲雄
- ・小黒千足
- ・故 三個鉄郎

〈事業協力の部〉

- ・(学)片山学園富山コンピュータ専門学校
- ・(株)ニュージャパントラベル
- ・(株)山田写真製版所
- ・(株)インテック
- ・北陸電力(株)
- ・(株)北陸銀行
- ・YKK(株)
- ・稲垣俊吉
- ・天坂仁美
- ・永山コニコ
- ・ナルシサ・ウィ・ユ

(敬称略)

NOWPAP富山事務所 開所！

～日本海側初の国連機関開設～

日時：平成16年11月1日(月)

場所：インテックビル (タワー111)



NOWPAP開所式

NOWPAP (Northwest Pacific Action Plan : 北西太平洋行動計画) は日本海と黄海の環境保全を目的とする行動計画で国連環境計画 (UNEP) の提唱のもと、平成6年に日本、中国、韓国、ロシアの沿岸4ヶ国により策定され「海洋環境に関するデータ・情報管理」、「海洋環境のモニタリング」、「海洋汚染発生時の緊急対応」等の事業が共同で進められています。

そのNOWPAPの本部事務局となるRCU (Regional Coordinating Unit : 地域調整部) が平成16年11月1日、富山市牛島新町タワー111内に開設されました。

RCUはNOWPAPの事業の調整、財務管理、関係各国及び他の国際機関等との連絡調整などを行うことになっており、環日本海地域の海洋環境保全の拠点として今後中心的な役割を果たしていくことになります。

“これからどうなる 朝鮮半島と日本”

講師：(財)フォーリン・プレスセンター理事長 寺田 輝介氏
前特命全権大使 大韓民国駐劄



—富山と環日本海の交流—

本日初めて富山市にきましたが、高さ3,000mを超す立山連峰が飛行場からくっきり見えることに感銘を覚えました。こういう都市というのは世界にあまりありませんね。確かに海と山のある都市はたくさんありますが、こんなきれいな山がこんなに近くにあるということで、富山県の売るべき商品の一つは山ではないかという気がしたわけです。

とやま国際センターは、日本の各地方公共団体がまださほど国際化に関心のない20年前に活動を始められました。この20年の事業の内容を見ましたら我々が考える事業というものすべてに手を付けておられます。なかんずく韓国、中国、あるいはロシアの沿海部との関係を強めておられるという諸活動に大変感銘を受けました。

—日本と韓国の関係—

とやま国際センターの20周年に際し、私は朝鮮半島でも特に南の韓国について話をしたいと思います。「近くて近い国」は韓国であるはずで、とすれば、もう少し韓国について理解を深め、関心を持っていただきたいと思います。

日本と韓国は1965年に国交が樹立しました。その後、韓国は紆余曲折がありながらも一步一步民主化の道を歩み、戦後民主化されてから2代目の大統領、金大中大統領が1998年、国賓として日本を訪問しました。そこで小淵総理との間で首脳会談をし、共同声明を発表。いわば日韓の新時代が切り開かれたのです。その延長線上で、私は在韓国大使として2000年から3年間韓国で勤務しました。

—冬のソナタブーム—

冬のソナタがお好きな方は女性が多く、男性はあまり関心がないかもしれません。実は私も見たことがありません。最近の冬のソナタブームには私も非常に驚いています。しかし決して悪いことではありません。それまで関心のなかったお隣の国に対して関心がでてきたというのは、それ自体いいことだと思います。

実はこの度の現象がソウルでもありました。その引き金になったのは「Love Letter」という映画です。韓国で120万以上の人を動員しました。これがすべて20代、30代の人なんです。また、最近では「世界の中心で愛を叫ぶ」という本も韓国で大ベストセラーとなりました。この本の読者というの

は10代からの女性だと思うのですが、日本における冬のソナタ現象と比べて年齢の違いが面白いですね。マスクミが便乗してブームを人為的に作っている向きもありますが、日本文化の解禁と比例して日本文化に対する関心が一段としっかりしたものになりつつあります。

—世界最大の日本語学習人口—

世界で最大の日本語の学習人口をもつのは実は韓国です。日本語の学習人口は約95万人。そのうち50万人程度は高校生です。というのも韓国の大学入試制度で外国語の選択の中に日本語が入っているのです。英語、フランス語なんかより日本語のほうが点をとりやすいのです。私も60歳から韓国語の勉強を始めて今もやっています。文法に関する限りは非常に勉強しやすいです。問題は発音です。若い人はそういう難関をすぐ突破できるわけですから、韓国の大学入試で日本語を選択すれば良い成績をとれるという利点があるのです。と同時に日本と韓国の経済関係が非常に充実してきたということも一つの要因かと思えます。

—韓国との能動的なお付き合いのススメ—

韓国3大紙の中でも非常に中庸的な中央日報が韓国人の意識調査を行いました。「一番嫌いな国」という調査がありまして1位は41%で日本なのです。次はアメリカで北朝鮮が嫌いという人はわずか10.8%にすぎません。しかし「韓国が最も学ばなければならない国」のトップにあげられているのも日本なのです。これはアメリカと答えた人14.3%を大きく引き離して32.8%の人がそう答えています。これはどう解釈したらいいのでしょうか？要するに情の世界ではまだまだ日本は嫌いだ、理の世界では、やはりまだまだ日本から学ばなければいけないという韓国人の複雑な心が伺えませんか？

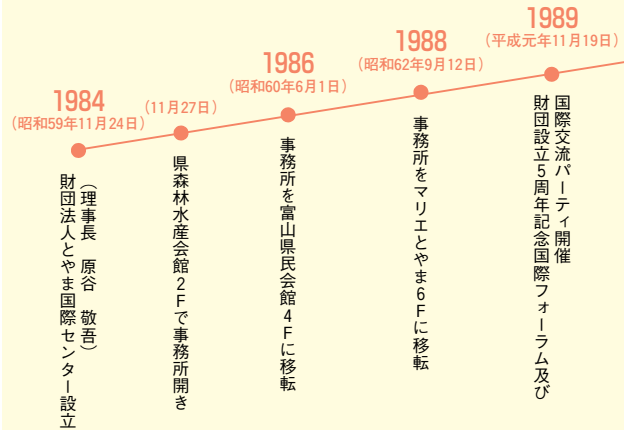
これを踏まえまして、やはりこれから日本はもう少し能動的に韓国とお付き合いしなければならないということがいえると思います。富山県と韓国江原道の文化芸術・スポーツ分野における交流協力協定は先見性がありました。江原道の道庁所在地は春川。冬のソナタの舞台ですね。政府レベルではなく地方レベルでの交流が中心となり、とやま国際センターが能動的に交流を展開していただければいいと思います。

(財)とやま国際センター 20年の歩み

財団法人とやま国際センターは富山県の国際化を推進する中核的な組織として昭和59年11月に創立され、このたび20周年を迎えました。この間、行政機関と民間団体や県民の橋渡し役として、国際協力業務や旅券関係業務を行うとともに、平成15年には日本海学推進機構やTIC日本語学校を開設し、さらに本年には富山県大連事務所や環日本海交流会館を開設したところです。

近年、県内に在住する外国人は1万2千人を超えるとともに、県内企業の海外進出が増加するなど、諸外国との相互理解を深め、友好関係を築いていくことがますます重要になっています。創立20周年を契機として、今後とも富山県の国際交流・協力や国際理解の推進に全力を尽くしてまいりますので、皆様方の一層のご支援、ご尽力をお願い申し上げます。

●(財)とやま国際センターの20年



創立20周年記念座談会

「これからの国際交流・協力 —多文化共生社会に向けて—」

日時：平成16年9月17日(金)
場所：富山県国際交流センター 研修室B

川口

(財)とやま国際センターも今年で創立20周年を迎えることになりました。この機会に海外の人達と積極的に交流をもってこられた皆様にお集まり頂いて、これから県民が世界の人々とどのように付き合い、活躍の場を広げられるか、またその中においてセンターはどのような役割を果たすことができるかなど、たくさんの意見を伺いたいと思います。

堀内

私は1982年、第2回富山県女性海外派遣事業に参加以来、その事後活動団体である富山県婦翔会員として国際交流に取り組んでいます。

当時は女性が2週間も家を空けるなど考えられなかった時代でした。その頃海外では既に環境問題や小児化問題、そして男女共同参画などに取り組んでいて、とても刺激を受けたのを覚えています。

伊藤

私は学生の頃から国際交流活動に参加するようになったのですが、イベントによく参加する人が必ずしも国際人ではないことに気づいたんですね。例えば地元に住む外国人とは交流がなかったり、自分と考え方が違う人を排除する言動があったり。それでイベントも大切だけど心の国際化を促すような教育の機会も必要だと思うようになりました。そして1996年に、異文化の人達と交流する力や、身の周りのグローバルな問題に気づき、その解決に自分が関わっていくための力を高めることを目指した「とやま国際理解教育研究会」を立ち上げました。

高橋

私は国道8号線沿いで営業するパキスタン人中古車業者を取材したんですが、店の周りにゴミが落ちていたりとか、違法駐車といったような日本人同士でもあるようなトラブルをまず耳にしました。話し合えば解決できるような内容なのに話し合いが持たれてないんです。しかし今は住民レベルでパキスタン人業者との話し合いが持たれています。実は私もこの取材がきっかけで彼らとの交流を続けています。

川原

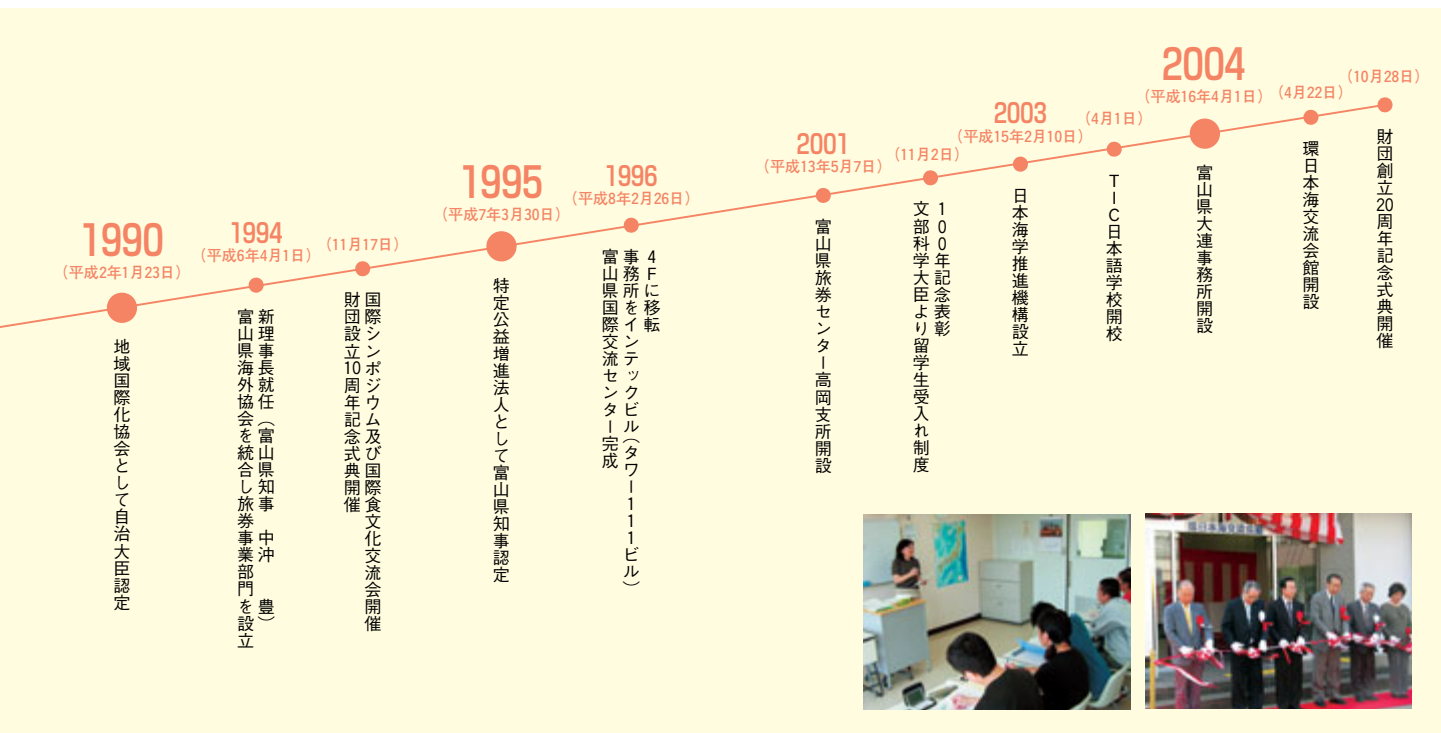
YKKは現在66カ国で展開しておりますが、事業方針をどのような形で実践するかは、各国の文化や歴史、宗教に合わせ現地で対応することになっています。インドネシアでは工場の敷地の中にモスクをつくったり、ブラジルの農場にはまず教会と学校を建てたりしています。これは現地の要望を受け入れたものですが、このような配慮やコミュニケーションがないと現地では仕事がしにくいと思います。

井川

海外ボランティアでも現地の文化や習慣を受け入れる気持ちがあるかないかで、その人が現地で受け入れられるか否かが決まると感じました。現地の生活は必ずしも楽ではないですが、現地の素朴な人々に触れると心が温まります。海外へ支援に行き、そこで助けられることが本当に多いんです。

高橋

自分たちと異なる“異文化”という捉え方ではなく、いろいろな価値観や習慣があって当たり前とみる“多文化”



高橋幸博氏 (北日本新聞高岡支社編集部長 連載「アジアの十字路口」取材班)
伊藤通子氏 (とやま国際理解教育研究会事務局長)
堀内道子氏 (富山県婦人会会長)
川原辰雄氏 (YKK株式会社黒部事業所総務グループ長)
井川文男氏 (JICA国際協力推進員)
司会：川口 康 (財団法人とやま国際センター専務理事)



という認識をもてばいいのではないのでしょうか？

取材でパキスタンへ行ったのですが、文化や感覚の違いを実感しました。「馬に乗せてやる。家が近くだから来い。」というので行くと、車で1時間ぐらしかかるんですよ(笑)。その後ミルクを頂いたんですが、いきなり「口を開ける」と言われまして、牛のお乳を直接口に搾って飲まされて…(笑)。

そういった習慣の違いを理解すべきだし、もちろん日本人の文化も誇るべきものがたくさんあると思います。外国の人の価値観に触れるなかで、私達はもっと成長できるんじゃないでしょうか？なぜ今国際交流について考えるのかというと、押しつけではなくて、その中に私達にとっていい事がたくさん含まれているからだと思うんです。文化や習慣の違いもあるので一足飛びに仲良くなれるというものでもないと思うんですが、とことんぶつかって理解しあえば新しい関係ができてくると思いますよ。

伊藤

理解しあえるまで諦めないことが必要ですし、失敗から始まる交流も大切にしてほしいですね。例えばタイでは子供の頭を触っちゃいけないという風習があるんですが、知らずに触って怒られたとしても、交流に失敗！ではなくて、本当のコミュニケーションはそこから始まるんだと思います。

川原

同感です。文化には進んでいるとか、遅れているということがないわけで、多くの人が自分の国の文化というものに誇りをもっていると思います。でも文化を押しつけては

いけない。同じ地域で社会生活を送る場合は、文化が違っていても社会生活上のルールを守ってやっていかなくてはならない。100%守ることはできなくても、お互い折り合いをつけてやっていくべきだと思います。最近の日本人はその折り合いのつけ方が下手になっているような気がします。

川口

最後に当センターへの要望等があればお聞かせ願いたいのですが…。

高橋

例えば出稼ぎに来ているブラジルの家族の子供が日本で暮らすうちに母国語のポルトガル語を話せなくなるという現象がおきています。子供は日本語の学校に通うとどんどん日本語を覚えて会話ができるようになる。しかし一方でポルトガル語が話せなくなってしまうんです。

井川

中南米の日系社会にはちゃんと日系の学校があって日本の子供はそこに通うことができるのに、日本では海外の子供達の受け入れ体制が万全ではないですね。

伊藤

もし教える人が少ないのであれば、そういった資格を持つ人が増えるようなバックアップはできないでしょうか？

川口

そういった面はセンターがサポートしていかなくてははいけませんね。今日お話し頂いたことを今後の事業に生かしていきたいと思います。みなさん本日はありがとうございました。

国際協力富山県民シンポジウム “JammRekk! アフリカから見た日本”

日時：平成16年10月23日(土)
場所：富山駅前CiCビル5階多目的ホール



Gouy-giによる演奏

セネガル出身のマンスール・ジャーニュ氏をお迎えしての講演、青年海外協力隊OGを交えたパネルディスカッション、小杉町のセネガルパーカッションバンド「Gouy-gi」による演奏も行われました。

マンスールさんの講演から…

日本に来る前は、日本ではほとんどの仕事をロボットがやっているという間違ったイメージを持っていました。日本人にとってもマサイ族が大草原に住んでいるところなどがアフリカの代表的なイメージになっているかもしれませんが、実際のアフリカはそれだけではありません。みんなの親しんでいる文化、例えばコーヒーはエチオピアが発祥の地です。茶道と同じようにコーヒー道もあります。サンバやジャズの音楽も奴隷としてアメリカ大陸に連れて行かれた黒人によって誕生した文化です。みんなが飲んでいるコーラも、アフリカでコーラの実のエキスを蜂蜜と水で割ってジュースにして飲んだのが始まりです。青年海外協力隊をはじめとした日本、ヨーロッパなどの国がたくさん援助をしてくれるのは大変ありがたいんですが、文化の交流をしていくことがまず始めに大事なことです。お互いが歩み寄って自分たちの真の姿を知らせる努力をしなければなりません。

今回の講演のタイトルは“アフリカから見た日本”となっていますが世界の中でも自分がどういふふうに見られているかということに気にするのは日本人だけだと思います。それは非常にいいことで、常に周りを気にするとか、強く自己主張しないということが平和をもたらすように思います。

そして日本の素晴らしいのは国民のほとんど全員が字を読めることです。しかし教育は行き届いているが“しつけがなっていない”という先進国特有の問題もあります。育児ノイローゼという言葉が最近聞かれますが、セネガルでは大家族なので1人で悩むということがありません。日本も50年前はそうだったと思います。日本社会は今少し原点に立ちかえることが必要なのかもしれません。

最初日本に来たとき、みんなが電車で寝ていることにびっくりしました。セネガルでは電車の中ではうるさいくらいに話しているんです。そして日本人は自分の停まる駅が来たら自動的に目が覚めるのにもびっくりしました。しかし日本に住んで12年になった今、自分も同じことをしていることに気づきました(笑) 結局人間はみんな同じなんです。



パネルディスカッションの様相



JICAボランティア現地レポート

今回はドミニカ共和国から届いた青年海外協力隊員 神谷桂二さんからの便りをご紹介します。

国立音楽院、国立初等音楽院で、ピアノやソルフェージュの指導をしています。

開発途上国では一般的に治安の問題から子供達が外で安心して遊ぶことができません。ここドミニカ共和国も例外ではなく犯罪発生率は日本のおよそ25倍とされています。そんな鬱屈した気持ちを持った子供達はスポーツや音楽といった芸術活動に触れたがっています。

私の音楽指導を受けていた生徒も、最初は眉間に皺をよせていたのが、音楽を通して情操が育まれ今では別人のように明るくなっています。音楽が子供の人格形成に与える影響は大きいのです。



しかしドミニカの初等教育に情操教育が含まれておらず、このように音楽の授業が受けられる生徒はほんの一握りに過ぎません。教えらるる教師が不足しているのです。音楽教育は青年海外協力隊などの海外からの支援に頼っているのが現実です。初等教育を終えた生徒が音楽の先生になるための高等教育を受けられる体制が整っていることが必要です。

ドミニカ共和国政府もプロジェクト・イスパ(教員養成校の設立)を進め、徐々にこのような状況が整いつつあります。このような努力が実り、子供達が音楽の先生になりたいという子供らしい夢をもてるようになったらいいと思います。



神谷桂二さん
派遣国：ドミニカ共和国
職種：音楽
派遣期間：平成14年7月～
平成17年7月

ドミニカ共和国へ11台の中古ピアノを輸送するプロジェクトを計画している神谷さんを応援するため、12月4日に行われたピーストークマラソンの中で青年海外協力隊富山県OB会の川尻会長が募金を呼びかけました。4万円近くの募金が会場できまり、後日ドミニカへピアノを輸送する際の一部にあてられる予定です。皆さんご協力ありがとうございました！

ODAタウンミーティング in とやま

～地域における市民参加型協力の可能性～

日時：平成16年11月21日(日) 場所：パレプラン高志会館カルチャーホール
主催：外務省、JICA、(財)とやま国際センター

日本が開発途上国に対する政府開発援助(ODA)を始めてから2004年でちょうど50年目にあたります。国際協力50周年と(財)とやま国際センター創立20周年を迎え節目にあたる本年、ODAについて考えるタウンミーティングを開催しました。

現在日本のODA支援額はアメリカについて世界第2位。途上国の開発に重要な貢献をしています。その一方で国内経済や財政状況から、国民の間ではODAに対する厳しい見方が増えており、ODAの予算は年々減っています。今回は、ODAとは一体何なのか、現在ODA改革ではどのようなことが行われているかという県民の皆さんの疑問に答え、率直にODAについて語り合うパネルディスカッションを行いました。

約80名の来場者の中からは、「中国への円借款は本当に必要なのか?」「国内でのリサイクル製品を発展途上国へ送るシステムが必要ではないか?」といった、活発な質疑が交わされ、塚田企画官からは、「国民一人当たりの日本のODA負担額は7,000円になるが、現在のODAのあり方について、国民一人一人が自分のこととして考えていくことが重要。」といった、国民のODAへの意識啓発について提案がなされました。



パネリスト

- ・塚田玉樹 外務省経済協力局 政策課企画官
- ・堂故 茂 氷見市長
- ・白山 肇 富山国際大学地域学部教授
- ・佐藤幸男 富山大学教育学部教授

コーディネーター

- ・松井治伸 NHK富山放送局 アナウンサー

平和と国際協力の列島シンポジウム ～(財)とやま国際センター20周年記念招致事業～

ピーストークマラソン in 富山

～1人ひとりにできること、1人のためにできること～

日時：平成16年12月4日(土) 場所：富山県総合福祉会館サンシップとやま
主催：JICA、北日本新聞社、全国地方新聞社連合会



ゲスト：白井貴子さん

ピーストークマラソンは「平和」と「国際協力」について考えていくためにJICA(独立行政法人国際協力機構)が2003年より全国で開催しているリレーシンポジウムです。今回で第14回目となるピーストークマラソンは、ゲストにミュージシャン白井貴子さんらをお招きして「平和と音楽」をメインテーマに行われました。

メインゲスト白井貴子さんとピーストークマラソン発起人であり歌人の田中章義さんによるトークが行われました。白井さんには国際協力に興味を持ち始めたきっかけなど、田中さんには世界中の子供たちの手による平和会議の様子などを紹介していただきました。子供たちが創作した詩や歌などを紹介するとともに、国際協力は小さなことから実践できることをお話していただきました。



日葡混合ジュニアサンバチーム「しきのソル・ナセンテ」が会場を盛り上げました。

また、白井貴子さんの他、竹内潔富山大学助教授、県内出身ミュージシャン谷中秀治さんらと交え、「平和と音楽」をテーマにパネルディスカッションを実施しました。竹内助教授は、ご自身のアフリカでのフィールドワーク体験を交えながら、「森林伐採によって生活を破壊されると音楽などの文化も破壊されてしまう。」と音楽を通して見た環境保全の重要性について話されました。また谷中さんは、県内NGO「アジア子供の夢」と協働して実現した、ベトナムでのチャリティーコンサートの模様を説明しながら、「音楽に国境はなく、平和のために音楽は重要」と話されました。

また、白井貴子さんのアカペラで「野生のマーガレット」、谷中さんのコントラバス独奏で「平和に生きるための権利」が演奏されました。

～鍵盤ハーモニカ、リコーダーをウガンダへ～

家庭で眠っていた鍵盤ハーモニカ50台、リコーダー60本がドミニカ共和国やウガンダ共和国に寄附されることになりました。春にウガンダ共和国へ音楽教師として派遣される青年海外協力隊候補生神田聖子さんの呼びかけにより実現しました。皆様のご協力に感謝いたします!

ムサカ

“ムサカ”はビザンチン時代からの伝統料理で、現在のトルコ西部から東地中海にかけてよくみられる料理です。セルビア・モンテネグロでも頻りに食べられる家庭料理です！



～作り方～

1. ゆでたジャガイモを皮をむいて6～7mmの厚さにスライスする。
2. 玉ネギは乱切りにし、きつね色になるまで油で炒め、ひき肉を加え、塩、コショウ、赤パプリカ、ニンニクで味を整える。
3. オープン用の深めの大皿に油をひき、ジャガイモを並べ、その上に2を重ねる。これを交互に繰り返す、一番上にジャガイモになるようにし、その上にベーコンとソーセージを切って並べる。
4. 180度に温めたオープンに入れて20分程度焼く。最後に溶きタマゴを入れ、さらに20分程度焼いてできあがり。



～材料～（4人分）

- ジャガイモ……………4個
- 玉ネギ……………1個
- ひき肉……………500g
- ベーコン……………5枚
- ソーセージ……………5本
- タマゴ……………3個
- ニンニク
- 赤パプリカ（粉末）
- 塩
- コショウ
- 植物油

TICからのお知らせ

これからの行事予定

初級日本語講座〈後期〉開講

平成16年12月18日～平成17年3月12日(毎土曜日)
10:00～11:30 環日本海交流会館
「郵便局を利用する」などの生活日本語を学びます
* 随時受け付けます。初心者も大歓迎！

第3回イングリッシュアドベンチャー開講

平成17年1月24日～平成17年3月14日(毎月曜日)
17:00～18:30 富山県国際交流センター研修室A
楽しみながら英語を学びます(高校生対象)

“平和一違いを超えて” 2000年ユネスコ・アジア太平洋 写真コンテスト入選作品写真パネル展

平成17年1月17日(月)～平成17年2月19日(土)
富山県国際交流センター 企画展示コーナー
グランプリ作品3点を含む入選作品を展示

各国の国旗貸し出します！

95ヶ国の国旗と卓上旗、万国旗、民族衣装などをお貸しします。お申し込みはホームページからも受け付けます！
<http://www.tic-toyama.or.jp/>

(財)とやま国際センター賛助会員募集中！

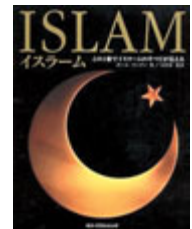
国際交流・協力事業にご支援いただけるようお願いいたします。

年会費（1口）個人会員 3,000円
団体会員 30,000円

ライブラリー新着情報！

異文化を楽しもう！

- ・ ロンドン金融術で学んだイギリス式仕事と人生の絶妙な知恵
- ・ 韓国ドラマ、愛の方程式
- ・ 「美しき日々」で始める韓国語
- ・ 図説インド神秘事典
- ・ イスラーム
- ・ アフリカ日和 など



各国料理を楽しもう！

- ・ ロシアおいしい味めぐり
- ・ パトリス・ジュリアンのデザート
- ・ タパスーみんなでつまむスペインの喜び
- ・ ケンタロウの韓国食堂
- ・ ベトナムの料理とデザート
- ・ バリごはん
- ・ はじめてのインド料理 など

創立20周年記念誌 発行！

当財団の事業案内パンフレットも改訂しました。
(日本語、英語、ロシア語、ポルトガル語、中国語、韓国語の6カ国語)

